

EFFECTOR

For an Inclusive Society

Vol.9 — 能登の未来を担う若き希望 — あれから1年 —

01 能登への思い×スタートアップ

02 能登で活躍する龍大生

03 阪神淡路大震災から30年



01 能登への想い×スタートアップ

ある日、能登地域の七尾市出身の越岡さん（文学部3年）が、RECフェローの有井さんを訪ねました。越岡さんは能登地域の活性化に関心を持ち、地域の未来について考えており、地域の課題を解決し、活性化を進めるためにできることを模索している最中でした。一方、有井さんは連続起業家として、複数の事業を立ち上げてきた経験があり、地域づくりに関わる活動をしています。

今回は「能登への想い×スタートアップ」と題して、お互いの視点から、能登地域の活性化について話し合っていました。今回の対談が能登地域の活性化に向けた一歩となることを期待します。



越岡 滉周

（文学部3年生）

石川県七尾市出身。龍谷大学附属龍谷大平安高校卒業の後、本学文学部へと進学。ご実家は浄土真宗大谷派のお寺。

2024年11月から石川県七尾市田鶴浜地区を中心に支援活動に参加、Spotifyにて「ひろがるのとラジオ」を展開中。



有井 安仁

（龍谷大学RECフェロー）

和歌山県出身。持続可能な地域づくりに欠かせない社会的投資の地域実装や、地域課題解決に取り組む企業の事業開発、ローカルベンチャー支援などに取り組んでいる。株式会社PLUS SOCIAL 取締役、ソラトチ株式会社 代表取締役、公益財団法人わかやま地元力応援基金理事長、和歌山大学非常勤講師など。

<出会い>

越岡：RECの有井さんを訪ねたのは、深草キャンパスに来ていた時に、「コーヒー片手に、やってみたいことについて、カジュアルに話そう」という看板を見たことがきっかけです。ただ、特に僕はスターアップや起業のことを考えることなく支援活動を行ってきました。しかし、令和6年の能登半島地震で被災した中で、今後何かやっていきたいな、何かを形にして、能登のまちや、自分の生まれ育った場所のためにできることは無いかなどは思っていました。そのような中ではあったのですが、その時は本当にフラッとコーヒーを飲みに来たような感じでした。

有井：ここ（ユヌスソーシャルビジネスリサーチセンター）でコーヒーを飲みながら「少し起業ということを考えてみよう」みたいな形でアプローチした時に、ぜひということですね、来ていただきました。

越岡：出身の七尾市は能登の玄関口にあたる部分です。ですので、県外から来た学生に、被災地支援や復興支援だけでなく、その後も関心を持ってもらうためのきっかけ作りをしたいという話は最初にしましたね。

有井：能登の支援で、みんなが来てくれる時のベースキャンプ的な役割みたいなことを考える中で、ご実家がお寺というところと、そのご実家が持っている空き家なんかもあるから、そういったところを拠点として活用できないかというところからアイデアを出しはじめました。

<環境>

越岡：能登の里山里海*と呼ばれるものがあって、それは非常に大切にされてきたものです。能登の里山里海は私の小さい頃、また生まれる前からその地域で存在していて、歴史的に見ても長い時間をかけて、住民や行政が手を入れながら守り、育ててきたものだと思っています。そういった文化や歴史は、やはり残していきたいと思っています。

しかし、震災前から過疎化や高齢化といった問題も抱えているので、新しい取り組みも取り入れながら、自分の生まれ育った場所に何か貢献できればと思っています。

有井：京都から少し離れて見ていると、どのように感じますか？人が減っているなど感じたりしますか？

越岡：私は高校から京都に来たので、現在6年間地元を離れています。その間、小学校や中学校の友人たちに会うことがなくなり、帰省しても同世代の人たちとも街中で出会うことがなくなったのは、とても感じているところです。

有井：お店などはどうですか？

越岡：七尾に関して言うと、イオンなどの大きなショッピングモールはありませんが、地域密着型の商店やスーパーはあります。商店街などはそれぞれの地域で個人商店を開かれているところが多いです。七尾の中でも、地域ごとにベッドタウンや商業の根付いた場所などといった特色に違いがあり、そのギャップは大きいと感じます。七尾だけでなく、能登全体でも地域によって差があることを実感しています。

有井：都市と比べると、地方で事業をすることには不利な点がありますが、それは人流が少ないことが影響していると思います。例えば、東京や大阪などではインバウンドなどで活気があり、昔ながらの商品も売れますが、地方ではそのような流れは期待できません。ただ、ECなどインターネットを活用すればより販路を拡大できる可能性もあります。

越岡：私は、七尾で何か事業をするのであれば、みんなの「第二のふるさと」のような場所を作りたいと思っています。スローな時間が流れていて、温かい人々と出会える場所を提供する空間を作れたらいいなと思っています。その中に地域の人たちが存在していて、地域の人もそこに溶け込んでいるような環境が理想です。

有井：その感覚は大事ですね。都市では味わえない人間関係や温かい人々がいることが価値だと思います。

越岡：そうですね。あとは文化的な部分も重要で、七尾にはお祭りなどが多く、そういった文化は都市部と比べて深く根付いています。

有井：能登といえば、先ほども出てきた里山里海という言葉がありますよね。普段、使いますか？

越岡：口に出して使うことは少ないですが、象徴的な意味を持つ言葉だと思います。金沢から能登半島までの道路が「のと里山里海街道」と呼ばれていますし、まちづくりにおいてもこの言葉はよく使われている印象があります。

有井：やはり里山里海は重要な価値ですね。昔は自然と共生することで人々の生活が成り立ってきました。現在、里山里海が失われつつある中で、これは非常に危険だと感じています。東日本大震災や能登の震災でも、その危機感が広がっています。

越岡：その通りです。海や山を守るためにもですが、純粋にそこに住んでいた人たちが亡くなってしまったり、流出したりしているという現状が、危機感を生んでいます。自然があって、それを守る人々がいて、丁寧に手をかけていかないと美しい自然は元には戻らないのだと思います。

有井：その感覚は非常に大切です。里山里海には人々の文化圏が必要で、もしそれが失われると回復は難しいという現実があります。しかし、そういった地域での活動やアクションを起こすことが難しい場合もありますね。

越岡：地域のコミュニティや1人で何かを興そうとした時に共感してくれる人が少ないということも、この地域でアクションを起こしにくくしている要因の一つだと感じています。

<つながり>

越岡：お寺って、割と今でも世襲制が残っているんです。特に真宗大谷派は、そういった世襲制が残っているところが多いので、やっぱりお寺を継ぐということや、浄土真宗の教えを受け継いでいくということは、お寺で生まれ育つ中でみんなのどこかにあると思います。しかし、まだ「父が元気」だとか、「祖父が続けている」という場所がほとんどで、特に親の世代に近い大学生にはそのようなケースが多いと思います。それでも、都市部に就職して、その後のどこかで辞めて実家に戻る決断をしなければならないという状況は、特に地方ではよく見られる現実です。

一方で、お寺だけでは生活をしていけないというのも現実です。地方だけでなく都市部でも同じかもしれませんが、普通の仕事をしながらお寺のこともやらなければならないという場合、普通の仕事という部分の可能性がより広がればいいなと思っています。自分でお金を稼ぐ力、それこそ起業のようなことをする力があれば、いろいろな選択肢が増えると思います。



有井：私は寺で生まれた子供たちの置かれた環境というか、その一つの特殊性ゆえの利点があると思います。いずれは自分の寺を継いでいくんだろな、という進むべき将来が見えているからこそ、いろんなチャレンジをしてみようという気持ちにもなれる環境があるかもしれないですね。だから、それに続いて、次のステップとして何をしていくかというタイミングが重要。そして、そのもう少し手前の部分、根本的なところで言うと、やっぱり人とのつながり、そして、同世代のつながりが重要だろうなと思います。

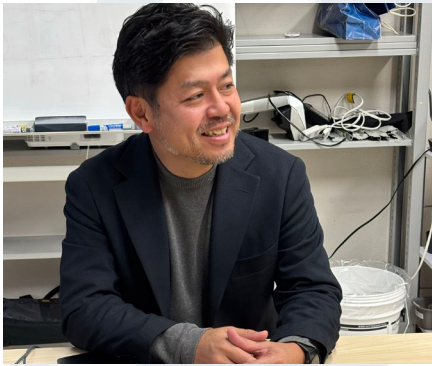
越岡：寺の仲間の同世代もそうですし、今回の震災関連では元々関係がない人たちと能登をどうつなげるか、そのつながりを作るためにも、何か役立つ存在になりたいと思っています。

有井：いろんなお仲間や、寺院があって、多分そこにも同世代の子供たちがいて、そこもつながると、お寺同士の競争があるかもしれないけど、そんなことよりもちゃんと地域と皆のお寺も協力していけるようになるんじゃないかな。そのためにやはり同じような世代のお寺同士、宗派が違ってもあるかもしれないけど、そのつながりをすごく大事にしていければいいと思います。

越岡：お寺同士で特に競争とかはないですが、支え合いや助け合いは絶対必要になってくるなというのを肌で感じています。ですので、そういう横のつながりっていうのは大事だと思いますし、それが宗教関係なく「助けてくれる人」っていうのを純粋に作れるんじゃないかなと思っています。

有井：越岡君と何回かお会いして話を聞いている中で感じたのは、越岡君のやろうとしていることっていうのは、周りから見ると違うフィールドに見えるかもしれないけど、中心では重なっていると思います。今自分が学生として、京都の大学に來ている中で、能登に関心を持ってくれる京都の学生たちともつながっていて、また地元のお仲間寺院の、同世代の人たちや、少し上の人たちとか、そのような人たちとのコミュニティもあると思います。そこをうまく取り持つための、軸を強くしていくには、何かしらの事業性と継続性が必要なので、それをどのように作ったらいいかなっていう、多分、今それぐらいの段階なのかな。慌てる必要もないよ。

越岡：この表現が正しいかわかんないですけど、目標のために何かやってる中でたまたまできたぐらいの思いですずっと動いていて何年後かに、「あ、形になってる」みたいな達成の仕方の方が僕はすごくいいなと思います。



<未来に向けて>

越岡：ここ5年みたいなところで言うと、やはりまだまだ本当の意味での復興は進まないと思います。2024年の11月に東日本大震災の被災地である福島県を見て特にそう思いますし、5年、10年経ってもやっぱり悩み続ける。それが復興という言葉なのか、まちづくりという言葉なのか、それはわかりませんが、おそらく能登も5年後ってなると、今ある課題は、長期化して続いていくと思います。例えば、ボランティア不足であるとか。復旧作業をしてくれる方の方が泊まる場所がないとか。若い人が帰ってこないとか。これは災害とは関係ない気もしますが…。

有井：本当に震災っていうのはもともとあった、地域課題みたいなのを顕在化するとよく言われるし、若い人が帰ってこないっていうのも本当にその通りだなと思います。

越岡：震災があったからこそ気づけた自分もいますし、自分の人生を変えることができたという部分もあるので、目の前のこの状況に応じつつ、誰のための、何のための復興なのかを常に考え続けることになりそうです。今の自分に何ができるかはわかりませんが、本当にできることを、自分にできる最大限を、少しずつ積み重ねていける未来にしたいなと思っています。

有井：自分の経験から一つアドバイスを送るとしたら、やっぱり小さくても良いから自分の事業を持つということ。すごく小さくてもいいから。「地に足ついてなくて、地域のことやその将来のことがわかるのか」みたいな部分があると思います。それは別に何か大きな事業ではなくてもいいですけど、地域で何かしらの看板をもっていろんな人と話をすると、すごく話がしやすいかなと思います。



また、可能性っていう話だと、まさにこういう越岡君みたいな学生さんたちっていうのが、可能性だと思います。「災害は地域にある課題を顕在化させる」のであって、課題はもともとあるんだよね。それは例えば、京都も同じだし、和歌山も石川も。都市部には都市部の課題があるし、田舎には田舎の課題がある。災害があると、よりその課題として、リアルなところが見えてくる。

一方でその課題があるからこそ、その地域にとどまるとか、その地域のことをなんとかしなきゃいけないと思う人たちが生まれるっていうのも事実だと思います。僕らの世代っていうのは、ちょうど阪神淡路大震災が起きた時に学生だった人たちです。当時ボランティア元年と言われていて、そういう大学のボランティアセンターとかで活動していた人たちがその経験を持って、次の震災のボランティアを支援する。だから、だいたい日本のNPOの中間支援は、僕らぐらいの世代が多かったりします。次はやっぱり東日本大震災があって、その時に当事者、もしくはその被災支援に入っていた学生たちっていうのがまた次の未来を創る世代になっている。もちろん災害があったことはすごく悲劇ではありますが、その当時アクションした人たちが、次の世代を創っていくっていうのはもう日本の、わずか数十年の歴史の中でも一つ事実としてあることです。そこが一番の希望なんです。同じような課題意識を持っている人が、「そうだね」って言ってくれたり、「一緒にやろうよ」とか言ってくれた人、そういう人たちとつながっていくと良いと思いますね。そうすると、自ずと「じゃあこういうことやろうよ」っていう、自分からじゃなくても、誰かがアイデアを出してくれるかもしれないし、そうするとその中でうまくいくことが見えてくる。結果としてそれが重要なこととして、前にすすんでいくと思います。

※「里山里海」

■里山とは

集落、農地、それらを取り巻く二次林、人工林、などが組み合わさって形成され、人が適度に利用することで、豊かな自然が形成・維持されてきた地域です。里山は、人の生活・生産活動の場であると同時に、多様な生きものの生息・生育空間ともなり、さらには地域固有の文化や景観も育むなど多様な価値を併せ持っています。

■里海とは

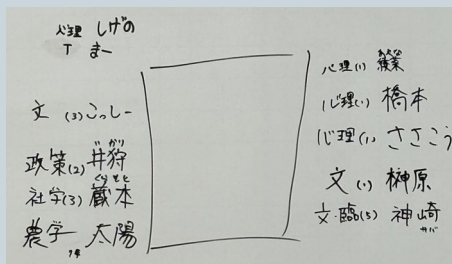
人が様々な海の恵みを得ながら生活するなど、人の暮らしと深い関わりを持つ沿岸域を里海と呼びます。里海は生産性が高く豊かな生態系を持ち、魚類の産卵場所や稚魚の生育場所など、海の生きものにとっても重要な場所です。

「能登の里山里海」は、日本列島のほぼ中央に位置する石川県の北部、日本海に突き出た能登半島の4市5町に広がっています。2011年6月、新潟県佐渡市の「トキと共生する佐渡の里山」とともに、国連食糧農業機関（FAO）により、日本で初めて世界農業遺産に認定されました。

02 能登で活躍する龍大生

2024年1月1日、能登半島を中心にM7.6、最大震度7の巨大地震が発生しました。この地震により日本海沿岸の広範囲に津波が襲来したほか、奥能登地域を中心に大規模な二次災害が発生し、甚大な被害をもたらしました。元日に発生したこともあり、帰省者の増加による人的被害の拡大や新年行事の自粛など社会的にも大きな影響があり、本地震の翌日には被災地の救援のため派遣された航空機による航空事故（羽田空港地上衝突事故）も発生しました。

それぞれの想い、それぞれの形で被災地支援を行う本学学生と、東日本大震災時から積極的な活動を行っている滋野先生（心理学部）にお話を伺いました。



Q：災害当時の記憶と支援活動に参加したきっかけを教えてください。

西村：私は滋賀県彦根市出身で、2024年1月1日、携帯の緊急地震速報が鳴りました。その時私は受験勉強の休憩中で、母と一緒にいました。突然地震が来て、慌てて1階に駆け下りて、母や姉と一緒にテレビに釘づけになりました。その後、津波警報が発生しているという話を聞き、体がゾワゾワしたのを覚えています。

無事に合格して、大学に通うことが決まりましたが、それまでは災害やボランティア活動について特に考えることはありませんでした。

しかし、大学に入学してからは、新しいことに挑戦したいという気持ちが強くなり、偶然「ポータルサイト」でのボランティア募集広告を見つけました。それに応募し、ツアーに参加することになりました。そのツアーを通じて、浄土真宗本願寺派本願寺金沢別院の方々にお世話になり、その後は個人的にお願いして、また一緒に活動することになりました。それからずっとご縁が続いているという感じです。

滋野：私は、今回の能登半島地震を受け、関西から福祉施設への救援物資を届けるとともに、今後の支援につなげるためのニーズ調査を行う先遣隊として、1月6日から現地に入りました。

そこで見聞きした状況を京都へ持ち帰り、研究室で小規模な報告会を開きました。当時、メディアでは一般ボランティアの自粛要請が報道されていたこともあり、「関心はあるが、どのように行動すればよいかわからない」という学生が多かったように思います。

その後も継続的に学生たちと能登を訪れ、災害ボランティアや地域の方々との交流を続けています。京都でも能登マルシェや防災食カフェ、勉強会を企画しています。

東日本大震災の際、私は大学生という立場でボランティア活動に取り組みました。現在は大学教員として学生を引率する立場にありますが、それと同時に、一個人の支援者として復旧・復興に関わり続けたいと考えています。

＜のとコネクト（学生団体）で活動する学生＞

- ◆越岡 滉周（文学部歴史学科 3年生）
- ◆田中 綾菜（心理学部心理学科 1年生）
- ◆橋本 明歩（心理学部心理学科 1年生）
- ◆佐々木 滉介（心理学部心理学科 1年生）
- ◆榊原 大芽（文学部歴史学科 1年生）
- ◆神崎 陽香（文学部臨床心理学科 5年生）

＜ボランティア・NPO活動センターで活動する学生＞

- ◆蔵本 千優（社会学部現代福祉学科 3年生）
- ◆井狩 咲希（政策学部政策学科 2年生）
- ◆西村 太陽（農学部食品栄養学科 1年生）

橋本：私は富山県出身で、現地で地震を経験しました。兄と二人で高台へ避難し、兄の知人の家に一時的に滞在させていただきました。しかし、父は災害時に職場へ向かう必要があり、家族全員の無事を確認できず、とても不安でした。また、親戚が輪島市に住んでいることもあり、何か支援できればと考えていました。大学入学後に「のとコネクト」の前身となる活動を知り、参加しました。現在もその活動を継続しており、個人的にも輪島や氷見などへ足を運んでいます。

神崎：私は福岡出身で震災当時は帰省しており、ぴくりとも揺れを感じませんでした。ニュースやテレビの中で地震を知りましたね。京都に帰ってきてからも、特に詳しい話はしておらず、現実味はあまりなかったです。大学が始まってからも、何かしらの関わりがあったわけではなく、特に大きな影響は感じていませんでした。私がこの活動に関わるようになったきっかけは、本当にたまたまです。2024年2月の末に、滋野先生の活動の一環で越岡さんたちが能登に関する新聞の学内展示をしていました。そこにふらっと立ち寄り、越岡さんの話を聞いて初めて身近に感じました。

その中で「今度能登に行くけど来ませんか」と声をかけていただき、それから数日後に能登に行きました。初めての顔合わせから一週間も経たないうちの活動とかなり特殊でしたが、これがこの能登震災ボランティアの始まりでした。

最初から「絶対震災ボランティアをするぞ!」という強い意気込みがあったわけではありませんが、当時休学期間だったこともあり「この時間を使って何かできるなら」と思い、始めました。

榊原：地震が起こった日は愛知県の実家で過ごしていました。テレビをつけていたので、地震が発生した瞬間をNHKで見っていました。

最初は小さな揺れで収まりましたが、再び揺れが起こり、住宅街が崩れていくのをテレビで目の当たりにしました。何もできないことが悔しくて仕方なかったです。この経験から、受験生だった当時の自分は「大学に進学したら自分は何らかの形で能登半島のために行動しよう」と考えるようになりました。

龍谷大学に進学後、授業で滋野先生との関わりを持ち、そのつながりで能登支援活動をしていた越岡さんや神崎さんとも出会いました。この出会いから、今私は「のとコネクト」の一員として活動しています。



佐々木：私の地元は長野県で、1月1日は受験生として勉強していたのですが、突然緊急地震速報が流れ、周りには家族もいない中で非常に不安でした。テレビがないため、YouTubeのニュースで、津波警報が出ているのを見て、心がざわざわしました。滋野先生の活動を知り、私にもできることがあるかもしれないと思い、参加することに決めました。

井狩：私は滋賀県出身で、震災が起こった瞬間、家族とショッピングモールにいましたが、最初は私だけ揺れを感じ、不安で泣いてしまいました。その後、周りも地震に気づいたようで状況が一変しました。私自身も不安で、泣きながらその場にいました。その後、ボランティア活動に参加する決心を固めました。最初は、家族から危険なので止められていたのですが、阪神淡路大震災のボランティアを経験している父親から、「行ってこい」と後押しされ、参加を決めました。

蔵本：能登半島地震が発生した瞬間、私はテレビを見ていました。映し出された能登半島の映像を見て、以前福島県と宮城県を訪れて学んだ「震災がどれほどのものを壊してしまうのか」という恐ろしさや津波の怖さがまず思い出され、また同じことが起こるのか、という恐怖を感じました。その後、能登半島地震で被災された方々への支援をしたいという思いから、現地での支援活動を行いました。こうしたボランティア活動をはじめ、活動の中でもっと多くの人と関わり、支援の輪を広げていきたいと思うようになりました。

Q：能登の地域住民とのつながりをどう感じていますか？

橋本：震災当時、隣近所の方々が声をかけてくださったことが、とてもありがたく感じました。慌てている中で声をかけてもらうことで、少し冷静さを取り戻すことができました。このような声かけは、二次災害の軽減にもつながると考えています。しかし、高齢化や過疎化が進む中で、人との関わりが減り、物理的な距離も広がっているという問題があります。その結果、私が体験したような助け合いが難しくなるのではないかと危惧しています。今後の課題を若者の人手不足の問題も含め、現代社会の構造を考慮しながら、考えていく必要があると思います。

蔵本：ボランティア活動についてですが、作業だけをする場合、あまり地域住民と関わることはないので、2025年2月に仮設住宅のサロン活動に初めて関わらせていただきました。そこで住民との交流を持つことができたと思います。その中で、住民が「また今年もお正月を仮設住宅で迎えると思わなかった」と言っていたことが印象に残っています。仮設住宅での生活は、家を転々としていくことが大きな課題であり、また、周囲にお店があまりないという現実もあります。しかし、仮設住宅は物資が届きやすいという便利さもあるため、住民が仮設住宅から離れられないという状況が見受けられました。この便利さに慣れてしまったことが、現地のボランティア活動にも影響を与えていると感じています。地域の不便さや課題が、今後の支援活動において重要なポイントとなるのではないかと考えています。

Q：同じ想いを持つ者同士、どう連携していきたいですか？

田中：それぞれ能登に関わる活動をしていても、お互いに交流する機会が少ないため、この中にもほとんど会ったことがないという方がいらっしゃると思います。のとコネクトとしては、そういった能登を想う方々が集まり話せる場をつくりたいという想いがあります。現在は学内で定期的を開催しており、今後は関西をはじめとした他の地域にも広げていきたいと考えています。

滋野：災害を経験すると、「何かをしたい」「助けになりたい」という気持ちが芽生えるのは自然なことだと思います。しかし、実際に被災地を訪れると、「何もできなかった」「本当に被災された方の力になれただろうか」と無力感を覚えることもあるかもしれません。むしろ、私たちが地域の方々から元気や勇気をもらうことのほうが多いと感じることすらあります。そんな中で、大学生が現地へ足を運び、地域の方々に想いを寄せ、関わり続けようとする「行動」こそが、被災地の力になるのではないのでしょうか。滋野研究室や「のとコネクト」では、七尾市田鶴浜地区を始めとした地域とのご縁を大切にし、息長く関わりを続けています。避難所での支援や地域との交流を通じて、田鶴浜の皆さんとは「○○さん」「○○くん」「○○ちゃん」とお互いに名前呼び合う関係が築かれています。「被災」「支援」といった地震発生当初の立場や役割を超え、共に地域の未来をつくる「仲間」として、細くとも長く関わり続けることが大切だと考えています。



Q：今後の活動と龍大生へのメッセージをお願いします。

神崎：まずは個人が身近にできることとしては防災バッグなどを備えることが大切だと感じました。それに加えて、もしもの時にどう動くか、大学で防災教育を行ったり、地元で家族と一緒に備えをすることも大事だと考えます。また、実際に災害が起きてボランティアとして関わることになった場合、学生は行政や他の専門家のように直接的に復興に貢献できるわけではないかもしれませんが、学生にもできること、学生にしかできないこともあると思いますし、避難所に行ったり、現地で活動したり、その過程を見ることは非常に重要で、その過程を経て、当事者意識を持つことだけでもかなり変わると思います。

自分の地域が被災地になった場合、経験・知識をもった自分自身がその地域で資源のような存在になれるよう、そうした経験を積むことも大切だと考えています。大学生であれば、その活動が自分にとって有意義なものになると思いますし、またそれが周囲の人々の役に立つことにもつながると信じています。そして、今後全国の大学や地域で少しでもこのような意識が広がっていくことを期待しています。最初は大学のボランティアセンター等に行ってみるなど、きっかけはなんでもいいと思います。そこから、個人的な活動や自分の人生を通してどのように震災や被災地に関わり向き合っていくのか、じっくり考えてもらえたらと思います。

越岡：私たちは、みんな能登というものを通じて、つながることができると思っています。私も現在、滋野先生と一緒に活動をしています。こういったつながりや現地でのつながりは、小さなきっかけが始まりで一期一会の関わりの中で違うものに結びつくことで、次のステップが生まれると思います。同じ大学生の皆さんに伝えたいのは、震災に関わるというのは辛いかもしれませんが、それを避けて想うことをやめてしまうのは本当にもったいないことで、まずは能登を想うという一歩を歩んでみるのが重要だということです。実際に動くことで、見えてくることが多いと思います。最後に、ここに集まっていたいただいた学生の皆さん、職員の皆さんにもお伝えしたいことがあります。学内外で様々な活動をしている方々にとっても、このような機会をいただけるのは本当に嬉しく、地元住民としても皆さんが関心を持ち、支援を続けてくださることは、私たちにとって本当にありがたいことです。できれば、その気持ちを持ち続け、細く長く続けていってください。できることがあった時には、皆さんができる範囲で力を貸していただければ、それは本当に大きな助けになります。今回の能登半島地震だけでなく、震災が起きることによって多くのものを失い、同時に新しいものが生まれることもあると思います。次にどこで災害が起きるか分からない中で、自分たちの身の回りにある危険について目を向け、生活することが重要です。そうすれば、大切な人を守ることができると思います。皆さんがその思いを持ち続け、行動に移すことが、次の災害に備える一歩となります。日常は、いつ崩れ去るかわかりません。自分や大切な人を守るための一歩を歩んでもらえたらと思います。



滋野 正道
(心理学部 心理学科 講師)

実践を通じて、若者が地域に意思を持って参画・行動できるプロセスデザインを研究。
一般社団法人ココカラストUDIO 理事。

03 阪神淡路大震災から30年



黒川 雅代子

(くろかわ かよこ)

(龍谷大学短期大学部教授)

専門は社会福祉学。大切な人を亡くした人の支援について研究。著書は『あいまいな喪失と家族のレジリエンスー災害支援の新しいアプローチ』（共著）等。遺族会「ミトラ」代表。龍谷大学短期大学部 学部長。

2025年1月17日で「阪神淡路大震災」から30年を迎えました。

阪神淡路大震災は、1995年（平成7年）1月17日午前5時46分に発生し、兵庫県南部を中心に最大震度7の激しい揺れが襲い、約25万棟が全半壊、多くの人が倒壊家屋の下敷きになり、6,434人の尊い命が犠牲になりました。当時の記憶とこれからについて、龍谷大学短期大学部 学部長の黒川教授にお話をお聞きしました。

<当時の状況を振り返って>

阪神淡路大震災の時、私は龍谷大学短期大学部の学生（社会人学生）でした。当時は大阪に住んでいましたが、ものすごく揺れました。被災地に住んでいた学生も多かったので、友人のことがすごく心配でした。震災のあった日は後期試験中でしたが、もちろん試験は中止になりました。試験が中止になったので、私は学生をしながら非常勤看護師として働いていた大阪府立千里救命救急センターに仕事に行くことにしました。センターにも被災者が運ばれてきました。ドクターズカーで医師とともに、避難所に行くこともありました。

後期試験が終わった後は、淡路島の北淡町（震源地）の診療所で、看護師ボランティアとして2週間ほど滞在しました。その後、神戸市長田区に活動場所を移しました。神戸市は、震災当時大規模な火災が発生し被害が大きく、まだまだ人手が足りない状況でした。仮設住宅の建設が遅れ、入居が難しい状況下で避難所にいた人に「地震で死んでいたらよかった。そしたらあんたらにこんな迷惑をかけなかったのに」と言われ、とてもショックでした。戦後日本の復興を支えてきた高齢者の人たちに、こんなことを言わせる日本の現状に心が痛みました。それが福祉を学ぶ原動力となりました。

<震災後の遺族支援とその研究の歩み>

私が活動していた避難所は、当時としては先駆的だった私設の福祉避難所のようなところでした。一般の避難所で肺炎になったり、体調を崩されたりした方のための避難所でした。私が活動していた団体は、灯籠を作り亡くなられた方の名前を書いていただく、鎮魂のセレモニーを行ったりもしていました。参加された方が、「初めて亡くなった妻とこどもに手を合わせることができました」と涙ぐまれた姿が、今も心に焼き付いています。

阪神淡路大震災は、都市部で起こった大規模な地震のため、鉄筋の建物が倒れており、その様子は壮絶なものでした。また、自分たちの知っている街が大きく変わってしまったことに大きなショックを受けました。

4月に入り避難所が閉所し、ボランティアから学生に戻った私は、福祉の重要性を再認識し、阪神淡路大震災の活動を卒業論文にしました。短大卒業後は、関西学院大学に編入学し、遺族の支援について研究したいと考えました。神戸で遺族会に関わっていたこと、救命救急センターで多くの人を看取ったこと、阪神淡路大震災での経験があったからです。大学院でも、継続して遺族支援をテーマに研究を続けました。様々な実践活動の中で疑問に感じたことを研究するというスタイルは、今も変わっていません。

龍谷大学短期大学部に就職し、龍谷大学370周年事業に申請し、遺族会「ミトラ」を立ち上げました。

現在は、死別の喪失だけではなく、あいまいな喪失理論についても研究しています。東日本大震災では多くの人が行方不明になりました。行方不明者の家族の支援が必要であったことから、あいまいな喪失理論につながりました。阪神淡路大震災でもあまり知られていませんが、今も行方不明のままの方が3名おられます。そのうちの1名のご家族に震災25年目、30年目にお会いすることができました。「ずっとモヤモヤしていた気持ちがあいまいな喪失だったのだとわかった」とおっしゃっていただきました。

阪神淡路大震災の経験が東日本大震災につながり、そしてまた阪神淡路大震災につながりました。

<「忘れない」ということ>

南海トラフ地震がいつ起こるのか分からないと言われています。去年はその危険度が高まっているという話も出ていました。しかし、人はどうしても「自分は大丈夫」と考えてしまいがちです。

短大では、東日本大震災で子どもを亡くされた方からお話を聴く機会を設けています。アイリンプループロジェクト（子どもたちが津波で亡くなった場所に自然に咲いたフランス菊を全国に広め、いのちの大切さを伝え、震災の伝承を目的とした活動）に賛同し、深草キャンパスにフランス菊を植栽しています。「忘れない」ということは重要です。自分が経験していないことを他人事とするのではなく、共感することができる感性と、自分の身にもいつ起こるか分からないという危機感を醸成できたらと考えています。そして万が一の時私たちは、自分の命はもちろん、他人の命も守るためにはどうすればよいのかを考えておく必要があります。そのためには、事前の教育や準備が大切です。東日本大震災の際、釜石ミラクルと言われたこどもたちの避難行動は、防災教育の賜物です。例えば大学で行う避難訓練も、皆さんはどれだけ真剣に取り組んでいるでしょうか。実際に災害が起こった場合、本当に自分の身を守ることができるのか、学生自身に考えてもらいたいです。

東北には「津波てんでんこ」（津波が起きたら家族と一緒にいなくても、てんでばらばらに逃げ、まずは自分の命を守れ）という言葉があるようです。みんながバラバラに逃げられるのは、家族がきちんと避難していると信じることができるからです。そのためには家族で事前に避難について相談しておく必要があります。

災害について、日常生活の中で考え続けることが重要です。深草キャンパスにあるフランス菊と看板を教室移動の時に見て、考えていただきたいと思います。

阪神淡路大震災は、学生たちにとっては生まれるずっと前の歴史の1ページかもしれません。しかし、震災で大切な人、ものを失った人にとっては、決して歴史の1ページではありません。せめてそれぞれの災害が起こった日には、人々に思いを寄せたいと思います。そして、そこから何を学ぶのか、多くの先達の知恵から得ることは多いと思います。



大学に咲く「フランス菊」

■お問い合わせ先

REC事務部（京都）

Tel：075-645-2098

E-mail：rec-k@ad.ryukoku.ac.jp

龍谷大学社会連携事例集特別編集

EFFE  **TOR**
For an Inclusive Society

第9号 2025年3月発行

発行：龍谷エクステンションセンター（REC）

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

<https://withdragon.rec.seta.ryukoku.ac.jp/>

